



自著紹介

『出雲国誕生』

(吉川弘文館、2016年11月)

大橋 泰夫

(島根大学法文学部社会文化学科教授)

本書は、古代出雲国がどのように形成されていったかについて、考古学と文献史学、歴史地理学との学際的研究の成果を中心に一般向けにまとめたものです。

島根大学は出雲の地にあります。奈良時代の西暦733年に、土地の様子や特産物、地名の由来などを記した地誌『出雲国風土記』が完成し、政府に提出されました。風土記は全国で編纂されましたが、とくに『出雲国風土記』はほぼ完全に残っており貴重で、本書でも扱っています。

奈良時代の島根大学一帯は、『出雲国風土記』によれば島根郡山口郷に所在していました。大学構内の発掘調査によって、当時の人々が使っていた土器が出土し、島根大学ミュージアムに展示されています。東方にみえる嵩山の頂上には、緊急時に火をもやし煙をあげて都に急を知らせた烽とぶひが置かれ、その脇を隠岐

国に渡るための隠岐道という道路が延びていたことも記されています。

奈良時代の出雲国は国・郡・里の三段階に編成され、国に国府、郡に郡家という役所が置かれていました。それまでの古墳時代に地域を治めていた出雲国造などの地方豪族は郡の役人に任じられ、都から派遣された国の役人(国司)の下位に位置づけられることになります。

島根大学考古学研究室では、出雲国の形成過程を考えるために松江市朝酌町廻原1号墳の発掘調査を行いました。調査によって、この古墳は出雲で最後に造られた古墳の一つであることが分かり、国郡制に基づいて地方支配が強化されていく中で、豪族層は古墳築造を終えていくことが明らかになりました。こうした学生とともに実施した調査結果も本書には盛り込んでいます。

古代の出雲は、7世紀後半から8

世紀初めの奈良時代に入る頃、大きな変革を迎えました。本書では、この点を詳しく紹介しています。『出雲国風土記』に記された出雲国府、郡家（郡役所）や道路の発掘調査成果などからみて、出雲国では7世紀末頃から8世紀にかけて、役所や都から延びる古代山陰道の整備が進んだことがわかります。こうしたあり方は出雲国だけではなく、全国的に広くみられるものであり、国府の設置を契機として諸国で国の骨格は形成されていきました。

出雲国の中心にあったのは国府であり、今の松江市大草町を中心にした意宇平野に位置し、六所神社の境内地と重なって中心施設の国庁がみつかり、周辺の施設とともに史跡公園となっています。付近には『出雲国風土記』に記された、山代郷正倉

（郡役所の倉）や寺院（四王寺跡、来美廃寺）も整備されています。八雲立つ風土記の丘展示学習館にある出雲国府の模型には、大陸風の丹塗り瓦葺き建物が立ち並ぶ様子が復元されています。

『出雲国風土記』は、わが国の古代史研究に大きな影響を与えてきました。本書では古代出雲の姿を紹介し、地域社会の実像に迫ることを心がけました。少々専門的なところもありますが、出雲の地で暮らし学ぶ島根大学生のみなさんにはぜひ一読をおすすめします。その上で、『出雲国風土記』に記された、出雲国府をはじめとする現地に立って古代出雲の世界を知ってほしいと思います。

